石巻復興きずな新聞

第14号

本紙は、石巻市内の仮設住宅および市街地の復興公営住宅向けに発行・配布する無料情報紙です。毎月10日発行。

～石巻に根っこの生えた写真家たちの写真展～

石巻を伝える写真「つづく展2」

「伝えたいことがある。残したいものがある。だから撮りつづける―」

縁あって石巻に根を下ろし、それぞれの視点からシャッターを切り続けてきた、出身も背景も異なる４人の写真家たちが、合同写真展「つづく展２～石巻に根っこの生えた写真家たちの写真展～」を開催します。

参加するのは、海と共に生きる漁師たちに惚れ込んだ平井慶祐さん。震災前も今も、日々シャッターを切りつづける地元新聞記者・渡邊裕紀さん。徐々に明るくなっていく夜明けの空に震災後の石巻を重ね、「いしのまきのあさ」を撮りつづけている鈴木省一さん。「人はなぜ生まれ、死にゆくのか」を写し、「なにものか」を遺そうとする故郷裕美さん。県外からボランティアをきっかけに石巻に入り、今も住み続けている方もいれば、石巻で生まれ育ち、震災前から石巻をカメラに収め続けている方もいます。

きっかけは、震災から丸６年を迎える今年２～３月、石ノ森萬画館の第64回特別企画展として開催された写真展「つづく展」。そこで意気投合した４人。「日々様々な思いを抱きながら撮りつづけてきた石巻の写真、そしてそこに込めた思いをたくさんの人に観てもらいたい」と、第二弾企画として「つづく展２」の開催に挑戦することにしました。

写真展を１回開催するには、数十～百万円ほどの制作費が掛かります。４人は自分たちの写真をホームページで販売して制作費を集め、今後も写真展を続けていきたいと考えています。

「見てもらいたい世界があり、出会って欲しい人がいる。思いを馳せて欲しい場所があり、知ってもらいたい思いがある。写真にはそれを伝える力がある」。４人の写真家たちの石巻への思いを感じに、ぜひ足を運んでみてください。

（きずな新聞　あき）

【会期】７月28日（金）～９月10日（日）
【会場】下記参照
【主催】つづく展制作委員会
【事務局】石ノ森萬画館０２２５－９６－５０５５

〈展示１〉

仙石線トレイン・ミュージアム

仙台と石巻を結ぶ石ノ森章太郎作品のラッピング列車「ＪＲ仙石線マンガッタンライナー」車内に写真が展示されます。電車に揺られながら、写真家たちの伝えたい思いを感じてみてください。

【運行スケジュール】
毎週日曜日運行
10時17分あおば通り駅発（石巻行）
12時25分石巻駅発（あおば通り駅行）

〈展示２〉

絆の駅 石巻ニューゼ

地元を愛する記者歴38年の名物館長武内氏がナビゲーターとなり、４人の写真の裏側にある背景やストーリーを解説してくれます。石巻の歴史や震災のエピソードなどにもぜひ耳を傾けてみてください。

【会場】石巻市中央２－８－２
【ＴＥＬ】０２２５－９８－７３２３
10時～18時　月曜休館
入館無料

〈展示３〉

荻小×ＡＲＴ おらほのはまがっこ

休校中の荻浜小学校を舞台に、地元アーティストたちの作品も同時に展示されます。半島部の穏やかな自然と、この空間でしか味わえない作品展示を楽しんでください。

【会場】荻浜小学校（牡鹿半島）
【開館時間】10時～17時30分　会期中無休
※入場にはリボンアートフェスティバルのチケットが必要です。

石巻南浜津波復興祈念公園は、2020年度末の概成を目指しており、その間に約10万本の植樹を予定しています。
この公園内に、市民やボランティアで植樹をし、次世代へとつなぐ復興の森をつくります。
第１回目の植樹祭である今回は、約3,000本の植樹を予定しています。

【日　時】９月２３日（土）
10時～12時　植樹（9時受付開始）
12時～　飲食コーナーオープン
13時～　交流体験会（つなぐ館見学、ヨガ、寄せ植え教室など）
【会　場】南浜津波復興祈念公園予定地内
【準備物】軍手、シャベル、帽子、飲み物
【主催・問合せ】石巻南浜津波復興祈念公園参加型維持管理運営協議会（090-6682-2777／古藤野）

言葉を越えて音楽で交流

集会所でイベントを開催してみませんか？

世界各国から100人の若者を集め、半年間かけて世界中を旅しながら歌やダンスのショーを行ない、平和や異文化理解の大切さを伝えるアメリカの国際教育団体「UP WITH PEOPLE（アップ・ウィズ・ピープル）」。先月、その卒業生たちを日本に招待するプロジェクトが行なわれました。企画したのは、2014年から約2年間石巻に滞在し、きずな新聞のボランティアに参加していた「ゆかちん」こと島林由香さん。彼女が「海外の子たちをどうしても石巻に連れていきたい！」と言うので、私も企画・運営をお手伝いしました。

川開き祭りではパレードに参加したり、お神輿を担いだり。最終日には三ツ股第二復興住宅でショーを行ないました。観に来てくださった住民さんたちの中には、涙を流して「感動した！」と言ってくださる方もいて、言葉が通じなくても、心は通じ合うのだなと感じました。

聞けば、三ツ股第二復興住宅では初めてのイベントだったそうです。住民さん同士も自然に交流されていて、良い機会になったのではないかと思います。

全国には今も東北に思いがあり、イベントをしたり、住民の皆さんと交流したいという方々もいます。今後、そういった団体や個人と仮設住宅や復興住宅の方々とをつなげ、イベントやサロン活動（お茶っこ）の企画をお手伝いできたらと考えています。「うちの団地でやって欲しい！」という方はぜひご連絡ください。

（きずな新聞　あき）

世界７か国11人の若者たちが歌とダンスを披露しました

布団クリーニング

お電話一本で取りに伺います！配送料なし！

☆布団　3000円前後
（価格は応相談）

☆毛布　800円～
（二重毛布は1200円～）

その他、ワイシャツ、学生服、じゅうたん、こたつ、カーテンなどなど、クリーニングに関することなら何でもご相談ください！

まずはお気軽にお問合せください！
見積もり無料！（見積もりだけでもOK！）

共栄クリーニング店　クリーニングのいーちゃん
石巻市南中里１丁目３-９-３０７
0225-22-6155／090-4888-2256

大川 ～帰れない故郷と新しいまち～

当時、長面・尾崎では、電気も水道も復旧していませんでした。そのおかげで、しなくてもいい苦労」を随分したなあと思います。電気がないと冷蔵庫が使えないため、魚のエサのストックができません。そのため、一日に何度も仮設住宅と尾崎を往復したり、500キロの水を買ってきて冷やしたりしていました。

長面・尾崎に電気が通ったのは、忘れもしない2013年8月25日。震災から2年5か月後でした。電柱を建てて、電線を引いて、あと数日で電気を流すだけ…となったときに、電線が切られて盗まれるという事件が起こりました。こんな苦労までしなきゃいけないの…？」という気持ちでした。長面・尾崎地区は東北電力管内で最後の未送電地区でした。何とかしてでも予定していた8月25日に間に合わせようと、東北電力が威信を掛けて、県内の高所作業車180台を集結させ、新たな電線を張り直してくれました。なかなか壮観でした。

また2014年春に漁協の牡蠣処理場が完成してからも水道がなく、私は処理場で使う水を週2～3回トラックで運びました。水を汲むだけで40分、移し替えるだけで40分。そんな生活が約1年続きました。他の地域では数週間、数か月でクリアできたところが、私の地域では何年も掛かりました。

そんな苦労を経て2014年10月5日、長面浦番屋が竣工しました。竣工式当日は、長面・尾崎出身者が多く暮らす仮設三反走団地、追波川河川団地から送迎バスを出し、地区出身の方々が大勢集まりました。長面伝承太鼓や神楽も披露され、最後には盛大な餅撒きも行われました。

約半年後の2015年4月5日には、番屋内にカフェをオープンしました。かつて住んでいた場所でのんびりと話ができる場がほしい」「長面浦を訪れる人を温かくもてなしたい」という地域の女性たちの思いを力タチにしたものです。かつて長面浦に群生していたハマナスがもう一度いっぱい咲く日が来ることを願って、はまなすカフェ」と名付けられました。

番屋やはまなすカフェが出来たことで、人の流れが変わったと感じます。震災後、長面や尾崎を通るのは、がれき撤去や復旧工事の車だけでした。それが今では、地元の方はもちろん、県外の方も足を運んでくれるようになりました。長面・尾崎地区は危険区域でもう住むことはできませんが、地区内外の人たちと交流を深めることで、生業を立て直し、地区の未来を創っていきたいと考えています。

（長面浦海人　小川英樹）

●はまなすカフェ
090-7330-3311／日曜10～15時営業

ひよっこ先生　其の十
包括ケア奮闘記

こんにちは、市立病院の藤戸です。私事ですが、この6月に男の子を授かりました。元気すぎるほど元気で夜も大泣きして大変な毎日です。

さて、子どもができて改めて人の生死について考えるようになりました。人は生まれてきたら必ず最後は死を迎えます。それは間違いありません。では、その最期を迎えることに、どのようなイメージを持っていますか？

２０１３年の死因統計では約30％の人が「がん」で亡くなり約20％の人が心臓関係の病気で亡くなります。多くの人が病気を抱えて最期の時を迎えます。治すことのできない病気と付き合っていく中で、医療は役割を変えていきます。「治す」ことから「支える」ことが医療の役割となります。何を支えるのか？それは生活です。患者さん本人や家族の皆さんが穏やかに安心して暮らしていくことを支えます。このような医療を緩和ケアといいます。病気に伴う痛みやつらさを和らげ、本人や家族が「自分らしく」過ごせるように支えることを目指します。そんな緩和ケアにはいくつか方法があります。一つは入院して受けるもの、そしてもう一つは在宅緩和ケアです。住み慣れた家で最後まで自分らしく過ごす、そのお手伝いをさせてもらうのが在宅緩和ケアです。

石巻には「石巻地区在宅ケア連絡会」（以下、連絡会）があり、多職種の連携がとても盛んで在宅緩和ケアが積極的に行なわれています。もし、この記事を読んで緩和ケアに興味を持っていただけたなら9月24日に東松島市コミュニティセンターでフォーラムが行われるのでぜひいらしてください。医療・介護の無料相談コーナーや連絡会メンバーによる在宅緩和ケアについての寸劇が行われます。もちろん、ふじとも寸劇に出演します！　寸劇の後には《地域で暮らしたいを支える》についてみんなで考える討論の時間もあります。

「あなたもわたしも仕事が終われば家へ帰る。それと同じように人生という仕事が終わる時は家に帰ろう」。兵庫県尼崎市で在宅緩和ケアを実践している櫻井隆先生の言葉です。

歳を取っても、病気を持っていても、みんなが過ごしたい場所で過ごすことができるそんな地域を作っていくためにみんなで一緒に考えていけたら嬉しいです。

（市立病院　ふじと）

●地域包括ケアフォーラム
【日時】9月24日(日)
ブース展示11～16時／フォーラム13～16時
【場所】東松島市コミュニティセンター（東松島市矢本字大溜1-1）
【問合せ】石巻在宅ケア連絡会事務局0225-95-1419

～雄勝の過去・現在・未来を語ろう～
◎●十五浜だより●◎

雄勝の過去・現在・未来と雄勝への愛を語るリレー連載「十五浜便り」、第2回目は雄勝で寿し店「伝八寿司」を営む加納竜司さんです。

＊＊＊

震災前の雄勝町は人口4300人、1700世帯を数える硯と漁業の盛んな自然に恵まれた町でした。伝八寿司は、そんな雄勝の上雄勝地区・新山神社近くに2000（平成12）年10月開店。当時は町内でも有数の若者が集う店でした。

しかし、今回の震災で約8割の住民が雄勝を離れてしまいました。雄勝の中心部には高台がなく、仮設住宅の数にも限りがあったのです。

住居や職・子供の学校の問題から人口流失は避けられず、とても商売ができる状態ではありませんでした。

しかし、震災の年の6月。雄勝の立て直しにはどうしても商店街が必要だ、出店してほしいと、商工会からの依頼を受けます。もう雄勝では店はできないと思っていましたし、ほかの地域に移転しようという話もあったのですが、非常に悩みましたが、雄勝のために自分ができることがあるならば」と、仮設商店街「おがつ店こ屋街」への出店を決意しました。2011年8月のことです。地元・雄勝の食材ですし店を続けたい、という思いも大きくありました。

ただ、震災後の雄勝では養殖は全滅状態。漁師さんもがれき撤去に携わっていて、地元の食材を使うことができません。長年付き合いのある漁師さんも「雄勝の食材を使えるようになるまで、1年、いや、2年待ってほしい」といいます。雄勝だけでなく石巻も塩釜も壊滅しており、当時は仙台まで買い付けに行っていました。

6年たった今では、漁師さんのがんばりもあり、雄勝の海産物を贅沢に使った季節折々のメニューを出せるようになっています。やはり地元の食材は鮮度が違います。全国から足を運んでくれるお客様も増えていて、うれしい限りです。

しかし、雄勝町はほかの地域と比べても復興の歩みが遅く、商店街の高台移転もあと2年ほどかかる予定になっています。商店主のなかには高齢の方もおり、商店街としてこれからもやっていけるのか、また、今は工事関係者の需要がありますが、それがなくなったときに雄勝の人口で商売が成り立つのか、不安は尽きません。

それでも、雄勝町は生まれ育った町。漁業者・商店主・職人などの枠組みを超え、若者が帰ってきたいと思える「新しい雄勝町」を、皆で共につくっていきたいと思っています。

＊＊＊

雄勝の海の幸を贅沢に使った海鮮丼（1700円）

かのう・りゅうじ／雄勝町下雄勝出身。現在は追波川の仮設住宅に暮らしながら、雄勝に通う。来秋、二子団地移転予定。雄勝店こ屋共栄会副会長。雄勝復興市実行委員会副会長。

●伝八寿司（0800-5575-9976）

かわら版
石巻まちなか情報局
http://www.ishinomakimatinaka.com/ Vol. 64

こんにちは！ 街づくりまんぼうの苅谷です。

ようやく梅雨が明けましたね。みなさん、今年の川開き祭りは行かれましたか？ 私は屋台村（橋通りコモン）の担当をしながら、橋通りや川沿いをうろうろしていました。

平日ながらも、いつもの通りから想像できないほどの人出で賑わっていました。花火が始まる夜には、まさに牛歩の歩み。肩をぶつけながらでないと歩けないのは、昔から続く川開き祭りならでは風景でしょう。

毎年思うことですが、川開きになるとどうしてこんなに人が集まるのか…。普段からイベントを企画したりして、どうやったら街に人が来てもらえるかを考える私たちにとって、川開き祭りは不思議な、そして、とても偉大なイベントです。

新しい川開きの風景

街なかでは、震災後いくつもの工事が進められてきました。北上川の堤防工事もその一つ。一部はすでに工事が完了し、川開き当日は、花火を見るため多くの人が堤防の上に座って花火を見ていました。私もそのうちの一人。川面をきらきらと照らしながら、大きな音をからだ中に響かせて上がる花火は本当に圧巻でした。

堤防に上がって花火を見る。これはきっと石巻の新しい風景になるでしょう。震災がなければ誰も想像しなかった景色かもしれません。昔ながらの良さを残しながら、少しずつ新しいものが付け加えられていく。石巻の街なかの様子を感じた、そんな川開き祭りの夜でした。

（まんぼう かりや）

▲堤防には人がずらり。大玉のあとは歓声と拍手が沸き起こりました

●○●お知らせコーナー●○●

◆ボランティア募集

新聞の配布を継続的にお手伝いしてくださる市民ボランティアを募集しています。月１日～ＯＫ！ 活動内容は、仮設住宅や復興公営住宅での新聞配布、データ入力、新聞印刷作業など。月３日以上活動に参加できる方には交通費補助があります。まずは見学からでもＯＫ！ 興味のある方は０９０－６６８６－８３１７までご連絡ください。

◆賛助会員募集

私たちの活動を積極的にご支援いただける個人・企業・団体を募集しています。

＜会員種別＞

■個人会員（新聞購読あり）
5,000 円/年×１口以上

■個人会員（新聞購読なし）
3,000 円/年×１口以上

■団体会員
10,000 円/年×１口以上

＜お申込み方法＞

お電話（ ０９０－６６８６－８３１７ ）にて、ご連絡ください。後日、申込用紙をお届けします。

◎ゆうちょ銀行
８１８店 普通 ３８６４７４８
石巻復興きずな新聞舎

◎郵便振替
０２２２０-０－１４１４０８
石巻復興きずな新聞舎

編集後記

２面に、海外の若者たちを日本に呼んで様々な交流や体験のプログラムを行なったことについて書きましたが、彼らは滞在中、石巻の家庭に１週間ホームステイをして生活していました。そのホストファミリー（受け入れ先）を探すのが私のシゴトで、５月下旬頃から募集を始め、10人の石巻市民の方々にホストファミリーをお願いしました。ほとんどのホストは英語が話せず、始まる前は不安だらけ。始まってからも、海外の子たちもホストも戸惑ったり、言いたいことが伝わらないイライラやモヤモヤがあったようですが、最終日は涙なみだのお別れでした。

新聞を書いていると、ついつい言葉で表現することに重きを置いてしまいますが、言葉がなくてもコミュニケーションは成り立つことを実感した一週間でした。（編集長 あき）

■石巻復興きずな新聞とは… 2011年10月～2016年3月まで、ピースボート災害ボランティアセンターが石巻市内の仮設住宅向けに発行・配布してきた無料情報紙「仮設きずな新聞」の後継紙。「最後のひとりが仮設住宅を出るまで」を目標に、2016年6月創刊。市内全仮設住宅および市街地の復興公営住宅に無料で配布。毎月10日、約6000部発行。

■石巻復興きずな新聞は以下の場所でも手に入ります。
ＩＲＯＲＩ石巻／雄勝店こ屋商店街／おしかのれん街／開成の拠り所・あがらいん／かめ七呉服店／からころステーション／川の上・百俵館／新蛇田第一集会所／道の駅「上品の郷」

■石巻復興きずな新聞舎
〒986-0813 石巻市駅前北通り1-5-3 TEL:090-6686-8317
kasetsukizuna@gmail.com / www.kizuna-shinbun.org

■発行元 石巻復興きずな新聞舎
■編集長 岩元暁子
■副編集長 川口 穣
■デザイン 矢野瑛子／妙本咲季
■記事執筆 小川英樹／加納竜司／苅谷智大
■協力 石巻専修大学関根ゼミ／石巻NOTE／川の上・百俵館／サードステージ／震災こころのケア・ネットワークみやぎ／包括ケアセンター／ピースボート災害ボランティアセンター／ゆいいきる／街づくりまんぼう／民宿めぐろ
■助成・協賛
宮城県「みやぎ地域復興支援助成金」、ラッシュジャパン「チャリティバンク助成金」